

あつた。しかし同志隊員と右往左往しているうちに一網打尽ソ連軍に拉致されシベリアで強制労働三年間、一日たった三百グラムの黒パン一つで空腹と寒さの栄養失調での労働で同志はばたばたと死んでゆく地獄のシベリア生活を生き抜き、運よく昭和二十四年引き揚げて故郷の悪質土砂まじりの飛行場を開拓地にあてがわれ、山積みした負債開拓団の組合長に推されて瀕死になつた組合財政の再建に貢献した博明<sup>いさお</sup>氏の勲しは、かつて父親が親戚から縁を切つて満州に行き、また引き揚げてからは満州などへ行つたからと言われたことにある。在天の父親の霊を慰めた孝養は涙ぐましい。

(引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

## 終戦の日を迎えて

静岡県 杉山茂代

昭和二十年、戦争が激しくなり、どこの家庭も父親

は兵隊に行き、家に残つたのは母親と子供たちだけでした。私は当時十歳でした。母と私は時々父の好きな食べ物をついばい持つて牡丹江の兵隊さんの宿舎で「在郷軍人」だった父と面会しました。

あるとき、父に会つた嬉しさで大はしゃぎだった私は、一匹の蠅を追つて蠅たたきを振り回していたら兵隊さんの背中に止まつたので無中で叩いた。父は急に立ち上がり、直立不動の姿勢で敬礼をした。母の顔色がさつと変わった。その兵隊さんは一番偉い人だったので。父と母の動きを見て、私もハツとした、どうなるのかと。兵隊さんは振り向いて、にっこり笑いながら、「とれたかね」と言った。私は「ごめんなさい」と謝つた。今は亡き父をヒンヤリさせたエピソードです。

私の家は祖父と祖母に父と母、小学校四年生の私を入れて五人家族、そして親戚のおばさんたちとその子供を含めて、老人、女性八人、子供十二人が行動を共にしました。

戦争が激しくなるにつれ近所の方々も引揚げを始め

ました。父のいない私たちは「死ぬも生きるも一緒」と覚悟はできており、牡丹江市内の遠山大路の家から動こうとはしませんでした。

八月七日ごろか、父が我が家に戻ってきました。父の顔を見て「ホット」安心、みんな明るい顔になり、やっと行動開始です。時は迫っております。遠山大路の家から八達溝の家にはひとまず避難しました。夜中の十二時過ぎ、パチパチという音で目が覚めると、満軍の兵舎が真つ赤に燃え上がっています。パンパンとピストルの音が聞こえてきます。ここも危いと、すぐ必要な物を荷馬車に乗せ真つ暗い道路を一里半ほど先の四道溝に向けてみんなで出発しました。そこは山を植林して夫婦の人に管理を依頼している場所です。子供一人で歩けるのは親戚の四年生の一利さんと私だけで、母も、祖父母も子供を背負い手を引き、暗い山道を無中で歩きました。夜が明けるころ、やつとの思いで四道溝に近くなると、パンパンと、ここもピストルや銃の音がするのです。安心できません。管理人が走って来て、「ジャングイ、もう牡丹江市内までソ連の戦車

がきている。火の海だというから大変だ。山を越えて逃げた方がいい」と言っている。不思議なもので、言われてみれば、真つ赤な空の向こうに戦車が見えるようです。女と子供、山を越えることなど、到底できません。父はすぐ「荷物を全部降ろし、急いで子供を乗せるように、そして八達溝に戻る」と言い、管理人夫婦は一生懸命に手伝い、引き返すことを「大丈夫か、大丈夫か」と何度も心配していました。

八達溝に戻ると、家の中の物を始め、すべて持ち去られて空っぽです。一晚の内に治安は悪化し、安全ではありません。追われるように、そのまま遠山大路に向かいました。八達溝の留守番、若夫婦も心配して途中までついてきました。八月十一日、ソ連軍の大爆撃があり、電気、電話などすべて不通となり、情報は入らず、真つ暗闇となりました。「どうした——？」何だか分かりません。

遠山大路の自宅に落ち着く間もなく、牡丹江省庁公舎の人が尋ねてきた。「街を回ってきたら東本願寺、西本願寺に親と子供たちが避難していたが、皆、殺さ

れていた。杉山さん、八月十三日に牡丹江最後の引揚げ列車が出る。鉄道を破壊しながらハルビンに向かう。これに乗らなければもう帰れない。私も乗るから杉山さんも必ず乗るように——」「まだその辺りに親とはぐれたちいさな子供が五十人ぐらいいる。何んとかしなければ——」。

八月十三日、雑草を頭からかぶり爆撃の間をぬって、二十人がかたまらず、少しづつ離れて牡丹江駅に向かいました。家で飼っていたセパード（軍用犬）、ポインター、セッターはかわいそうでしたが、紐で結わえて家を出ました。途中機銃掃射をうけました。弾丸も「ヒューン、ヒューン」ではなく「ブス、ブス、ブス」と身をかすめて地面にささるのです。その無気味な音は今でも忘れられません。やつとの思いで牡丹江駅にみな死ぬことなく、たどり着き最後の引揚げ列車（無蓋貨車）に乗りました。

汽車はゆつくりと動きました。途中では、ソ連兵に何度か汽車を止められ、わずかに持っている品物を取られながら。雨が降り、みんなずぶ濡れになり、便所

はバケツを貨車の隅に一つ置き、みんなで囲んで用を足しました。気持ちは早く早くハルビンへと思ってるが、ソ連兵は何か品物を取らなければ発車させない。後で聞きましたが、牡丹江神社の床下にかくれた人たちは全員ソ連兵に射殺されたと話しておりました。

ソ連兵は皆、肩から機関銃を背負っています。ちょっとでも動くと言射殺します。何にも武器を持たない私たちは全く無抵抗です。じつと我慢したのは自分が事を起せばみんなの生命にかかわるからです。全員射殺されなくても限りません。

八月十六日、汽車の中で「日本が負けた！」と情報が入り、「いや負けるはずがない」「そんなこと言うのは非国民だ！」と兵隊さんたちが刀を抜いて物すごい喧嘩となりました。私の叔母は、同じ無蓋車にいながら八月十八日に「香坊」という駅で、日本が負けたことを知ったと言っております。

八月十八日ころ、やつとの思いでハルビン駅に着き、無条件降伏を改めて知らされました。みんな歯をくいしばって耐えました。

最初にハルビン病院に収容されましたが、母たちは子供を連れて歩くのが精一杯で着のみ着のままでもありません。二日くらいいたのでしょうか。ソ連兵がドカドカと入って来て、「ここは今からソ連兵が使う！すぐ出て行け！」鶴の一声、私たちは直ちにハルビン会館に移りました。兵隊さんや開拓団の方々とは合流して約二千人の大家族になりました。

持ち物は略奪され、「日本人の男狩り」は、もう始まっておりました。ハルビン会館に移ると父たち男性は隠し持っていた日本刀を集め、ソ連軍に取られるより、処分しようと庭の隅に穴を掘り五十本ぐらい埋めました。女性たちは、給食で使うような大きな鉄釜で、持ち寄った食料を煮込んでいました。私にはおしる粉を作っているのだと教えてくれました。子供たちは久しぶりに自由になり、飛び回って遊びました。みんなで助け合い、ハルビンに着き、お互いに持っている物を出し合って一緒に食べられるなんて、こんな嬉しかったことはありません。大人も子供も大喜びで集まり座りました。そして、おしる粉を分け始めたときです。

カツ、カツ、という靴音とともに数人のソ連兵が入ってきたのです。銃とピストルを持って――。悪い予感が走りました。ソ連兵は、「手を上げて、男はみんな立て！」と言うのです。日本人の男狩りです。父の胸元にピストルを当てていたソ連兵の手は、ブル、ブル震えておりました。なぜか日本の男性は怖かったそうです。父がちよつとでも動けば引き金は引かれ殺されてしまいます。「父が動かないように」と心の中で祈りました。祖父も立ちましたが「ロートルは座れ」との命令でした。ソ連兵は立たせた父たちをそのまま連行していったのです。どこに連れていかれるのかと、不安と怒りでいっぱいでした。せつかく作ったおしる粉も、口にせずソ連兵に連れていかれました。後になって全員牡丹江に連行されたと言う情報が入りました。ソ連軍の男狩りにより女、子供だけになると、ソ連軍の将校がやって来て、「このハルビン会館はソ連の領事館になる。出ていくように」結局、作ったおしる粉はだれも食わず、慌ただしく移動が始まりました。次の避難先はハルビンの料理屋「銀鍋」でした。置

があつたので、なぜか「ホッ」としたのを覚えています。大小の部屋があり、床の間の天井は抜いてあり、いざというときに隠れるようになっておりました。私たちは一番広い部屋に割り当てられました。もちろん雑魚寝で、一畳に六、七人が寝るのです。こうして収容生活が始まりました。食料もなく、仕事もなく、大人たちはシラミ取りなどをしたようです。栄養失調でだれかが死んでいきました。子供たちは連れていかれることも、強姦されることもありませんでした。元氣な子は部屋の中に、じっとしていられません。外で遊んでいると、荷馬車に何か、いっばいあふれるように積んでくる。三台も四台も通る。何かと思つて二、三人で走つて行つて見ると、それは兵隊さんの死骸、屍で手や足が荷台から飛び出していた。――ああ―兵隊さんが―兵隊さんが―。びっくりして立ちすくんでしまつた。みんな恐ろしくなつて走りだしました。泣きはしない。でも一生懸命走つて帰り、母の顔を見て泣きながら報告しました。

ある日、ソ連兵が入つて来て、祖父を「使役に使う」

と銃でこずいて連れていった。母は祖父が高齢なので心配になり、どこへ連れていかれるか後をつけて行くど、「お前もついて来い」と銃でこずく。ゲイ・ペイ・ウー（ソ連の警察）を探して、急いでかけ込む。母は「老人で年を取っているが、どこに連れて行くのか」尋ねる。ゲイ・ペイ・ウーは「今日は使役で連れて行くので夜は帰す」とのこと、重ねて母は「道が分からないでしょう」と尋ねると、「連れて帰るから心配ない」、その夜祖父は帰ってきました。昼の食事は櫛のある半屋の中に入れられ、櫛の外から食事を差し入れてよこしたそうです。祖父は聞いても、はつきり言いませんでしたが、使役とは死人の穴掘りと片付けのようでした。それは、それはつらい仕事です。シラミは取つても取つてもわいてくる。病氣、栄養失調で子供は毎日死んでいく。母親はローソクをともし、線香をあげて供養していました。

毎夜のようにやつて来る夜の狼、ソ連軍の将校は兵隊をトラックに乗せてやつて来ると建物の罅りに兵隊を配置し、日本の女性が逃げたり、隠れたりしないよ

うにした後、ゲイ・ペイ・ウーに知らされないように見張りを立てる。狼は夜中じゅう暴れまわった。夜になるとローソクの灯も一段と明るくなり、泣いている母親がはっきり見えました。ソ連兵はその悲しんでいる母親を連れていき強姦する。体の大きいソ連兵は、嫌がる女性を軽々と抱き上げ思いのままだ。便所の中など、折り重なって犯されていた。開拓団の女性は便所の中で泡をふいて倒れていた。外に連れて行かれた女性もいた。朝、返してよすがが、みんな死人みたいにみえた。体が痛くて動けないという人もいた。気が違つて変になつた人もいた。助けることも、どうすることもできない。大人は髪を切り、お鍋のすすを顔に塗つて、そして小さく、小さくなつて寝ていた。子供は大きく、大きくなつていばつて寝る。毎晩、何人も女の人が犠牲になつた。夜がこなければいいのに。ソ連兵がこなければいいのにと願う。もし母のところにきたらかみついてやろう」と、起きていなければ、と思つても夜がくれば寝てしまふ。

神様が起こしてくださつた。夜中に「ハッ」と目が

さめた。私の頭の上にソ連兵がかがんでいる。そつと目を開くと雑魚寝している五、六列向こうを懐中電灯で照らしていた。照明灯のように、数人の兵隊は列の間を行つたり来たりして物色している。近づいて来る。兵隊の足が私の足に触つた。少しして、兵隊が止まつた。「これは大変、お姉ちゃんの寝ているところだ」私は離れていたので、泣いて暴れてもだめだ。「お姉ちゃんはお助からない」。とつさに私は、隣に寝ていた八歳になる従妹のリエちゃんを思い切りツネりました。よほど痛かつたのか、びっくりしてリエちゃんは飛び起き「ワァー」と大声で泣き出しました。兵隊はびっくりしてお姉ちゃんから手を放した。そして、大きな手でリエちゃんの背中を叩いた。リエちゃんは痛さと恐さで、また一段と大きな声で泣いた。私も無中になつて二人で泣いて騒ぎました。寝ていたほかの子供たちもびっくりして起き出し泣き出した。泣いているうちに兵隊は帰つて言つた。「よかつた、お姉ちゃんはお助かつた。連れていかれなかつた」、急いでリエちゃんの背中をみると、大きな手の跡がついていた。「リ

エちゃんごめんネ、痛かったでしょ。リエちゃんのお陰でお姉ちゃんは連れて行かれなかった。ありがとう」みんなで赤チンを持って来て、リエちゃんの背中に大きな日の丸をつくりました。その後は、子供が死んでも、お通夜はやめました。

父はハルピン会館でソ連軍に連行されてから、再び牡丹江に連れ戻され収容されました。鉄条網を張り巡らせ、周りを囲いソ連軍が自動小銃を下げて、巡回していた。雨も、しのげないような所で、食料もなく馬に食べさせる大きな糠の固まりを食べさせられ、飲料水もなく、雨が降った後にできる水たまりの水を、手ですくって飲んだということでした。使役に出たとき、食べられる物は何でも持ち帰ったと。私の家で仕事をしていた満人たちは、「ジャングイが捕まっている」とみんなで、代わる代わるソ連兵の目をくぐり、食料を運んできてくれたそうです。「ジャングイ、逃げろ——」「ジャングイ逃げる逃げる」と言ってくれたそうです。何とありがたいことでしょう。自分の命をかけないと、日本人を助けることはできないのです。

目が覚めると、母が「父の夢をみた。続けて三回みた。苦勞していたよ」と言う。朝、階下で声がする。「班長さんが帰って来た。帰って来たよ——」走って行くと、髯ぼうぼう、顔中髯だらけ、目の縁が白く、ギョロギョロと光り麻袋を肩に掛けて、みすばらしい人が立っている。母も私も、顔では分ならず、声を聞いて、やっと父だ、と確信しました。

「お父さん、御苦勞さまでした」

袋の中の靴下には、それぞれコウリヤンとお米が入っておりました。ソ連兵に見つかからないように、石けんを割って、その中にお金が挟まっておりました。「ジャングイ・ハルピンに帰ったら家族一緒に、また、牡丹江にもどってくるように——」「必ず戻ってくるように、みんなで待っているから——」と。父は「帰ってくるよ——」と別れたそうです。二カ月近い抑留中、危険を冒して、ずっと父に食糧を運んでくださった満州の方々。尊いお米とコウリヤンや大切なお金をもくごさいました。国籍を越えた人間愛です。私は、このとき、父から教えられました。

「人間、どんなに豊かで地位があっても、人を見下してはいけない。人を使っても、人に使われても、同じ、変わりない人間だから。相手に対してしたことが、いつか必ず、自分に返ってくる」ことを。

しらみのいっばいついた衣服は、太陽の当たる屋根に干した。髯を落とした父は、抑留中、「シベリア・ウラジオストクに行けば日本に早く帰す。だから行くように」。かなりの人が行ったようだが、茂代たちがだまされて、シベリアに行かなければよいが、ただ、それだけが心配だった」と。

終戦後、あらゆる物資が満州から消えてしまいました。あつという間に消えた。ソ連に運び込まれてしまったのでしよう。鉄道のレールまでも。『火事場ドロボー』とはこういう人のことでしょうか。

帰った父は、忙しかった。『銀鍋』のほかに、大きい大きい緑十字の旗を出しました。（ここは病院ですよ）、少しずつお金を出して、ソ連兵の相手をしてくれる人を頼んだという。女は強い！最後のどたん場にきても頑張る。

夜の狼たちはこなくなつた。だんだん寒くなつてきて、食料も乏しくなつてきました。一日も早く南下しなければいけない。二カ月あまり共にしたみんなと別れ、一足早くハルビンを出発しました。

新京に着く。駅の構内にゴザを敷いて寝るのですが、ここでも避難していた人がコレラ、疫病で、バタバタと死んでいきました。飢えに寒さが加わり、隣に死人が寝ていてもどうすることもできません。自分自身の体を動かすのが精一杯だから。

あの、数知れない死体を、だれが、どこへ運んだのだろうか。正に、『生き地獄』の有様でした。

ここにはいられないということ、次の日に出発！奉天に到着。避難民として、国際倉庫に収容される。ここも寒い。体はだんだん弱ってくる。何とかしなければ。父は動き回っている。繊維公舎の社長さんと出会った。「杉山さん！今、どこにいる？」「駅前の国際倉庫」「そんなところにいたら死んでしまう。会社の寮が三部屋あいている。移るといいよ」。

『地獄に仏』正にそのとおりでした。現に、おばさ



ん三人と子供が疫病にかかっていました。自分のことも分らない状態でした。急がなければ。＼ヤンチョ＼に、みなでやつとの思いで乗って寮に移動しました。

＼畳の上＼何とありがたいことでした。

十月十二日、菊田晃治（二歳半）死去。よく、ここまで頑張ってきたね。晃治君！

寒さは増すばかり、リエちゃんと私は食べるための新聞売り、春日町通り、青葉町通りは、車道、歩道に對して、二列ずつ、計四列の店屋が並んでいました。

父は「何んとしても、日本まで、みんな帰らなければ」と、熱があっても仕事をしました。病人が多いので、オマルが売れる。父が作って、母が売りに行く。一生懸命に作っても、たくさんはできません。ソ連兵の洗濯もしました。みんな、どんなにづらい仕事でもしました。奉天にいた日本人は、家財の売り食いでした。「—またまた寒くなってくる。リエちゃん。石炭を拾いに行こう—」きびしい寒さには勝てません。

横谷あつ子、國紀、菊田アツ子、深澤まさる、さやちゃん、みんな四歳以下でした。かわいそうな良い子

たちは、この大陸で眠ってしまった。生活が百八十度、変化したなか、「小さな命を精一杯生きましたね。天国に行っても、みんな仲よく、お手々つないで遊んでね、お姉ちゃんは、みんなが、丸くて、ポッチャリとしていてかわいかったことをちゃんと覚えていいるからね！」と。

頑張ったおじいさんも胃腸をこわし体調が悪い。父の体力もだんだんと落ちていく。父が作らなければ、母が売りに行けない。お姉ちゃんは残って看病していました。私とリエちゃんは毎日外に出掛けて行きました。

やつと春がやってきました。花が咲き、美しく。みんなお花が大好きです。

お花の咲いている木をみつけて取るのです。木に登ってお花を取っていると、親切なソ連兵が手伝ってお花を折ってくれました。嬉しかった。親切な人もいたのです。どうもありがとう。お花は二人の腕の中に入れていになりました。さあ、これから、花売り娘に変身しよう。リエちゃんはいつも私と一緒に。ソ連兵に会

うと、私の背中にかくれます。お花を取ってくれたソ連兵のお兄さん。このころ、リエちゃん、私と並んで歩けるようになりました。どうもありがとう。

いつものように青葉通りの四ツ角に立って、お花と新聞を売っていました。恰幅のよい日本の紳士が歩いて来ました。あつ、サイフをすられた。あつ、おじさんは気がついて満人を追っ掛けました。追いついた。よかつた。スリはサイフを返すと同時に袖口に隠してあつたカミソリの刃で紳士の動脈を切つたのです。首から血が噴き出しました。ドクン、ドクンと噴水のように血が噴き出していました。紳士は、私の横を走つて通り、反対の角のお医者さん宅へ行つたのですが、戸をたたいても、開かない。(ソ連兵が入つて来るので、どの家も鍵はかけてある) あきらめて戻つてきたが、みるみるうちに顔面蒼白になり、出血多量で倒れてしまいました。目の前で起こつた、数分の出来事でした。だれも助けてあげられません。スリが悪いのに、おじさんが殺されてしまった。見てた人もあつたのにだれも、おじさんのところに行つてあげなかつた。おじさ

んは、自分で歩いて、一人で死んでしまいました。私はくやくしてくやくして、でも何もできませんでした。子供の自分が情けなかつた。戦争に負けたから、何をされても仕方がない。

一日一日が生と死の戦いでした。そして、一寸先の命の保障は、どこにもありません。外地にいた、負けた国の国民の定めでしょうか？

ソ連兵に痛めつけられたからといって、めそめそしていたわけではありません。みんな明るく、じつと、我慢して、日本人の誇りを忘れずに、頑張つたのです。母たちは牡丹江を出発したときから、万一に備えて、「青酸カリ」を持っていたといいます。

日本人を帰国させる「嬉しい知らせが飛び込んできました。父は「もうすぐだ。頑張ろう。日本へ帰ろう」と張り切っていました。しかし、体は起さるのがやつとで、医者は、このまま仕事をすれば死んでしまう、と言いました。西山さんが鉄板を切つて、父がフトンの中で作る水筒が出来上がるたびに、父の体は弱っていきました。帰国準備しなければ。まず食料

(カンパン、ビケット)と水の確保でした。早く日本に帰りたい。父は死んでしまいそう。どうしたらよいのだろうか――。

ソ連から正式に通達がありました。日本人引揚げについて。第一に出征家族、次に民間人を帰す。名簿を作って早く提出するように言われる。

私の家以外は皆出征家族でした。一人でも早く帰った方がよい。おばあちゃんは、叔母の母として申請しました。

病気のおじいさんと父はゆつくりとでよい。みんなが帰った後で、母と私が、片付ければよいと思いました。ところが、突然、ソ連側から、先に「民間人を帰す」と帰国命令がきました。

さあ大変、おじいさんは、わか(母)におおさつても帰るといふ。母は、もちろん、「おじいさんをおぶって帰る」とおおいひもを捜してきました。

杉山道藏(六十一歳)死去。昭和二十一年五月二十三日、午前零時十五分、永田鶴吉医師のもとで、日本の土を踏まずして、帰らぬ人となりました。

火葬にし、遺骨を持って帰れたのはおじいさん、ただ一人でした。そして、次の日、一足早い出発となりました。メリケン袋にビケットをいっぱい入れて。水筒と二人千円の持ち物です。

コロ島より出発。この日は、大・中・小と三隻の船が出ました。私たちの船は、一番大きい「興安丸」、貨物船で一番遅い出港でした。船底で一畳に六人の割当てです。

毎日、小さなお椀に、朝は薄粥一杯、昼は乾パン五粒。夕方は汁煮一杯が配給されました。子供たちは、身動きできない船底を離れ、ほとんど甲板に出て、ゴム飛びをして遊びました。死者が出ると白い布に巻かれ、海に投げられ「水葬」にされました。船の後ろにはサメが泳いでついてきてました。おじいさんは遺骨になって良かったと思えました。一カ月後、興安丸は無事舞鶴に入港しました。先に出航した小さな船は途中座礁し、中くらいの船は伝染病が発生し、沖に停泊中でした。

日本に上陸する少し前、船の中で初めて、リング

の歌”を聞きました。明るい歌で思い出の歌です。いよいよ上陸開始、夢に見た日本、父と無事に着きました。母の首には、しっかりとおじいさんがいます。D Tを頭から振りかけられ、消毒してから入浴です。一列に並んでプールの中を通っていくといった方が正しいようです。とにかくさっぱりしました。国から支給された衣服に着替え、注射を三本打ちました。舞鶴港に引揚げ第一船、「御苦労様でした」と、恩賜の羊かん一切れと、男性には恩賜の煙草三本が配られました。

「羊かん、いただきますので、早く召し上がってください」、日本では私たちの帰りを、今か、今かと待っていたのです。有り難う。涙があふれて止まりませんでした。おじいちゃん、やっと帰って来たよ、現地解散となつてから、親子三人で食堂に入り、カレーライスとおしる粉を食べたら、三百円の支払いに、母は、これからの生活を考えると心配になつたそうです。お金は一人千円しか持っていませんから。

汽車の中、京都近くで女の人に黒パンをいただき、

とてもおいしかった。

清水の駅に夜中に着いた。駅員が「無蓋車なら奥津を通るのがある」と教えてくれ、木材と一緒に乗り込み、奥津駅で降りしてもらいました。「こじきみたいだから、暗い方がいいネ」。私は嬉しくてピョンピョン飛びながら、母の実家に向かいました。道をしっかりと覚えていたのが誇りです。

実家の姉たちも帰国。皆、それぞれ親戚にお世話になりました。私も奥津小学校四年四組に編入しました。父と母は奥津の浜で塩造りを始めました。小さなバケツを両手に持って、海水をくむのは大変です。大きな桶に入れた海水を、柄杓でバラバラと均等に砂浜にまくのです。固まった砂を集め、煮てにがりを取り除きます。毎日お塩を造りました。私にとっては、塩造りは、仕事というより遊びでした。

母が米と塩の交換に町へ行きます。私も一度、埼玉県に行く母について行きました。帰りの汽車で、かなり広い川に差しかけたとき、ポーポーと汽笛を鳴らす音にびっくりしました。見ると鉄橋の上を十人ぐら

いの男の子が手に小さな箱を持って走っているのです。汽車も急ブレーキをかけたましたが、一人の子供が逃げ遅れたのです。轢かれたと、皆、固ずをのみました。橋の下の方で「大丈夫だ！生きているぞ！」近くの家から梯子を出し、繋いでも届きません。そこで汽車の方を動かすことになりました。「頭を低くして動くなよ！」「頑張れ！」ゆっくり、ゆっくり汽車のデッキを男の子のところに動かせました。男の子が元氣よく下から上ってきました。みんな喜びの拍手です。十歳前後の男の子の手には、しっかりと靴みがきの道具箱がありました。命の次に大切な靴みがきの箱を離さなかつたのです。「この子は度胸があつて偉いなあ」と思いました。今は何をしていることでしょうか。

二年ほどして父の親友から土地と解体するという隠居家を譲ってもらい家を建てました。その後父は引揚げの労苦と、帰国後の塩田作業の疲れから病氣がちになりました。

北海道から、沖垣あさ江さんが父を尋ねて来ました。満州時代、女社長として大きな事業をしていた人です。

膝をボン、ボンと元氣よく打って話をします。私は大好きでした。

病氣がちの父が近所の裏を借り、共同でヒヨコを孵化し、四十五日の雛を育てる養鶏を始めました。鶏小屋に寝ながら鶏のことを知らない母に教えていました。その後、興津に養鶏組合を作り、組合長になりましたが、病氣が進んだため、八木間の佐野進一さんに組合長を頼み、会合の際はよく父と打合せをしていました。山口県の山中さん・横浜の杉山さんを始め、何人かの方が父の元へ尋ねてくさいましたが、病氣の父に会い、皆肩を落として帰られました。「お役に立てず、誠に残念です」父が一番悔しかったことでしょうか。

アメリカ兵がいるからと、クリスマス用の七面鳥も飼いはじめました。七十羽も、ガボ、ガボとおりました。中学生になり、お陰で諱名あだが七面鳥です。クラブ活動から帰って毎日大きなタライに二杯、玉ねぎをきざみました。涙をぼろぼろ流しながら。玉ねぎの好きな七面鳥が嫌いになりました。そして鶏舎の掃除が私の日課です。

このころ、父はほとんど寝ておりました。私は高校受験、落ちれば家が楽になる。そんな気持ちで受けました。「茂代さん合格です」家に電話が入りました。

父は、高校一年生の冬休み、一月二十七日に死去いたしました。四十三歳の生涯を閉じました。私たちを日本まで連れて帰った父に感謝し、お祈りするとともに、引揚げで亡くなられた皆様、戦争で命を落とされたすべての皆様に心より合掌いたします。

### 【執筆者の横顔】

杉山茂代さんは満州国寧安県城で昭和十年生まれであるから生え抜きの満州国民であり日本国民である。

父がその後、牡丹江市に移り杉山鋼工所を経営し吉林、桂木斯にそれぞれ出張所設置し、そのほか八達溝に農場、四道溝に植林をそれぞれ経営し手広く活躍していた家庭で育った。

しかるに昭和二十年八月、ソ連の不法侵攻にあい、空と地上から爆撃の連続で牡丹江は阿鼻叫喚の巷と化した中で、八月十六日には日本敗戦をきき、びつくり

するやら十一歳になる茂代さんは子供心に死なねばならないのかと思った。

そのうち何もかも置き捨てて引揚げ開始となって八月十八日に逃避したが、ハルビンの会館に兵士、市民と開拓団の方々と合流して二千余人の大家族となっていた。この会館にソ連兵が侵入してきて避難民から物品を強奪する。それに必ず女性を拉致していく。

暴行の限りをつくされた地獄そのもので、子供心にも忘れることのできない悪い思い出であった。

父はハルビンの会館からソ連兵に逮捕され、収容所におちこまれた。しかし父の会社で働いていた満州人の従業員が、ソ連の監視をおかして米や高粱を差し入れてくれたとのことで、二カ月後にハルビンにもどって来たときは家族みんな泣いて喜んだ。

父はハルビンにいれば皆殺しになると言って十二人の家族を連れて苦心惨憺、食無し宿なしどこに行っても野宿である。新京から奉天に出たがどこもここも毎日の生活は犬猫同然で、しかも生と死の共存の場であった。

二十一年五月に引揚げ前に祖父が病死した。一家泣き濡れて、翌日コロ島から興安丸に乗船、舞鶴港へ、そして母の生家興津にたどりついた。その間茂代さんは父の小間使いとして一生懸命協力したつもりである。父は引揚げ早々興津で塩づくりを始め、茂代さんは高校一年生になった。

悲しいかな父は昭和二十二年一月二十七日、大勢の家族を引揚げさせて四十三歳の生涯を閉じた。

茂代さんの両親は現地人の満州従業員やその家族から慈父、慈母のごとく慕われていた。事業は大きく拡大していったものをと父は口癖に言つて、満州人に感謝していた。茂代さんは父の心情を子供心に聞いて育つた。父を尊敬し、父に協力してきた情愛の清き気高い親子の絆を今もなお肌を感じ伝わる親孝行ものである。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

## 南無妙法蓮華經

福岡県 境野 静子

明治四十三年三月十九日、福岡県嘉穂郡桂川村にて生まれました。私の父は住友系の豆田炭鉱に勤めていたそうです。当時の炭鉱は余り景気もよくなく、皆、船に乗つて玄界灘を渡り、大陸へ大陸へとあこがれて渡つたそうです。父もまた、その一人でした。私たち三人の子供と母を残して、友人の紹介で満州鉄道に就職、単身満州へ渡つたそうです。そして私が七歳になつて、小学校に入学する前に母と三人の子供を連れて行くため、日本へ帰つてきました。その当時のことではっきりと記憶にあるのは、あの大連の埠頭が大きくて立派なこと。ボートという汽笛とドラの音が、今もハッキリと脳裏に残っております。大連から汽車に乗り、撫順炭鉱の職員宿舎についてびっくりしたことは、赤い煉瓦の五軒長屋の立派な玄関が一つ一つあり、中